秋田県市町村未来づくり協働プログラム
大仙市プロジェクト「『日本一の花火のまち』産業創出プロジェクト
～花火伝統文化の継承と発信～」における事後評価調書

１　プロジェクトの目的

「花火」をシティアイデンティティとして捉え、花火の伝統と文化の継承・発信に向けた取組を土台に、まちとしての個性や魅力づくり、産業の育成・振興、交流人口の拡大等につなげていく。花火産業構想のうち、花火の伝統と文化を後世に確実に継承・発信し、その価値を高める取組を推進するとともに、産業分野と連携しながら、花火に関する人材育成等を進めつつ、既存の観光資源との連携を図り、花火ブランドを活かした観光振興に取り組む。

２　プロジェクトの概要

策定年月日	実施期間	大仙市総事業費（千円）	交付金（千円）
H28.1.15	H28～R1	1,111,989 (1,043,152)	200,000

※（　）内は計画値

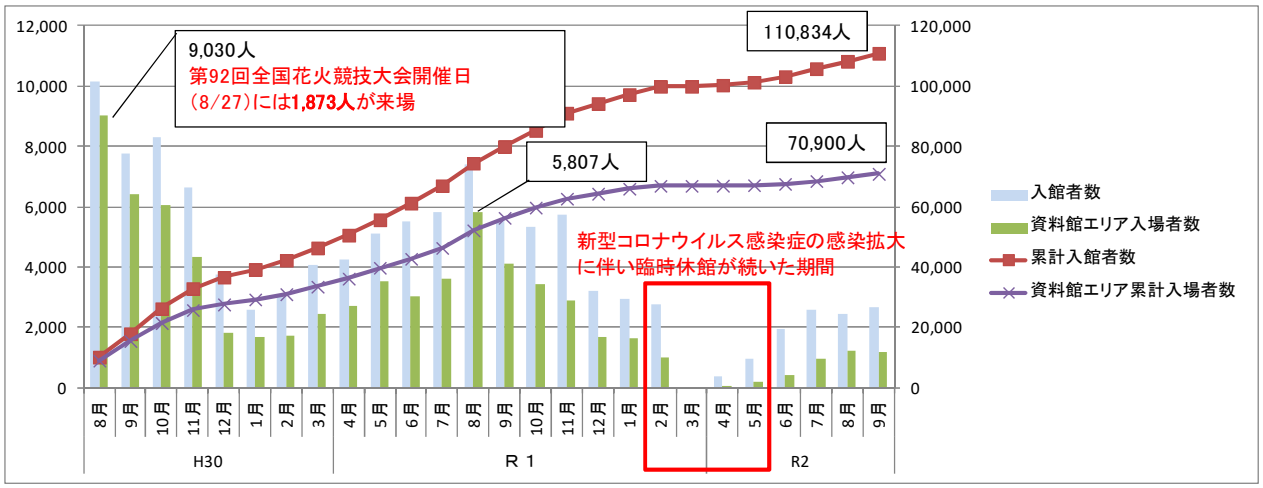
【プロジェクトを構成する事業】

事業名	総事業費（千円）	うち交付金（千円）	実施年度
１．花火の伝統と文化を継承し、発信する地域づくり	1,012,856	200,000	
（１）花火伝統文化継承資料館 はなび・アムの整備	981,197	181,922	H28～R1
（２）花火の伝統と文化の継承につなげる環境整備	30,257	18,078	H28～R1
（３）花火産業を支える人材の育成	1,402	0	H28～R1
２．花火ブランドを活かした交流人口の拡大	99,133	0	
（１）花火文化を活かした観光資源の拡大	18,405	0	H28～R1
（２）インバウンド観光の推進	80,728	0	H28～R1
計	1,111,989	200,000	

3　プロジェクトの成果指標と達成状況

指標名	基準値 (H26 年度)	目標値 (R1 年度)	実績値 (R1 年度)	達成率
はなび・アムの利用者数（人）	0	30,000	33,455	112%
花火資料の収集点数（点）	6,521	10,000	16,069	161%
花火学習講座の受講者数（人）	1,075	2,529	1,573	62%
大仙市内への観光客数（千人）	2,631 (2,487)	2,901	2,526 (2,524)	87%

※括弧書きは災害・少雪等による影響を除いた数値



4　経済波及効果分析等

本プロジェクトによる経済波及効果は、ハード事業費支出による効果が 14 億 3,300 万円、ソフト事業費支出による効果が 9,900 万円、プロジェクト成果による効果が 2 億 2,200 万円となっており、合計 17 億 5,400 万円であったと推計される。

（単位：百万円）

	直接効果	一次 波及効果	二次 波及効果	総合効果
ハード事業費支出による経済波及効果	938	292	204	1,433
ソフト事業費支出による経済波及効果	68	18	13	99
プロジェクト成果による経済波及効果	146	49	26	222
合　計	1,152	358	243	1,754

※　端数処理の関係で、総合効果とその内訳の合計が一致しない場合がある。

５　民間アドバイザーの意見

（民間アドバイザー：花火伝統文化継承プロジェクト　会長　塩谷國太郎　氏）

（１）情報発信の強化と展示の充実について

収集した約 16,000 点の資料を活用し定期的に企画展示を行っているが、単に資料をご覧いただくだけではなく、資料の説明に加え、時代背景や本市の花火の歩み、関連するエピソード等を交えながら案内することで、花火伝統文化の理解が促進され、その魅力やすばらしさをさらに発信できるのではないかと感じている。学芸員の方が配置されたということで非常に心強く思っており、資料の見せ方や展示内容に工夫を凝らしながら、より多くの方に来館いただける施設となるよう、取組を進めていただきたい。

（２）花火伝統文化の継承と人材の育成について

「大曲の花火」は、今や日本三大花火大会の一つに数えられるなど、日本最高峰の花火大会として全国的に評価されるまでに至った。当市に根付いている花火伝統文化は、先人たちが試行錯誤を重ねながら積み上げてきた伝統と、地域の花火に対する誇りや情熱が紡いできた文化の結晶であり、今を生きる子ども達にどう伝え、そして次の世代にどのようにつなげていくかが資料館に求められる役割の一つではないか。また、将来に花火伝統文化を継承していくためには、花火産業を支える人材の育成に加え、観る側の立場から花火を支える人材の育成を強化していく必要があると考える。

将来世代に確実に花火の伝統文化を継承していくため、今後も人材育成に係る取組を進めていただきたい。

（３）花火ブランドを活用した交流人口の拡大について

新型コロナウイルス感染症の流行を機に、オーダーメイド花火の打上など新たな取組が始まっている。取組の一つである修学旅行の誘致について、例えば校歌に合わせた打ち上げ、学校名やシンボルをイメージした花火を打ち上げるなどの演出も効果的ではないか。感染症との共存を踏まえつつ、様々な知恵を出し合いながらニーズを捉えた取組を検討する必要があると考える。

また、観光地ではお土産、食事に対するニーズが高いことから、商店街や小中学生、高校生も巻き込み、様々なニーズを取り込むことで地域の魅力づくりにもつながるのではないか。

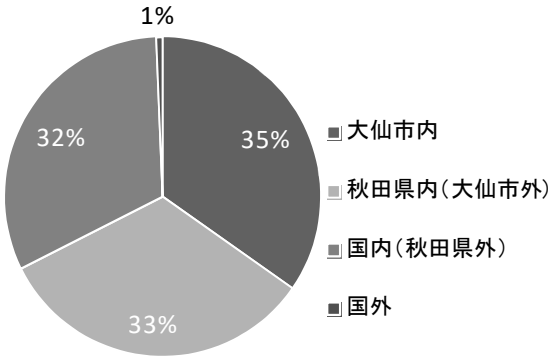
花火ブランドを最大限活用し、創意工夫を重ねながら交流人口の拡大に向けて取組を進めていただきたい。

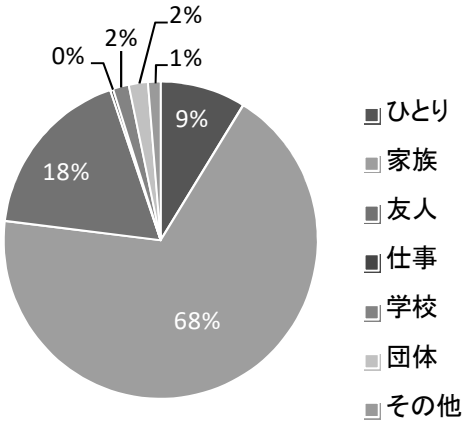
６　その他参考となる事項

（１）来館者アンケート

来館者に対するアンケート（回答者 308 人）によると、市民、県内の他市町村から来館した方、県外から来館した方がそれぞれ約３分の１となっている。また、同行者については、家族連れが約７割、友人が約２割となっている。

来館者の内訳





意見・要望

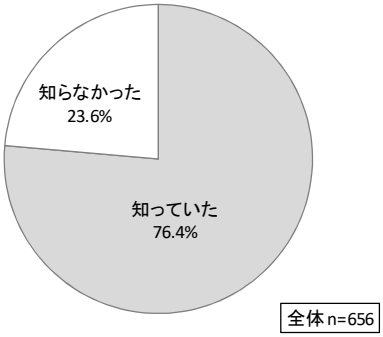
花火グッズを売ってほしい（線香花火、大仙オリジナルグッズなど）。体験型のものがもっとあればよい。	花火の町なのでこのような施設ができて嬉しい。高校時代にあったらもっと地元に愛着をもてただろうと思った。
昨年の花火大会が思い出され、県民歌に心がグッときました。すばらしいですね。来てよかったです。またふらりと来ますね。遠方の知人が来たらつれて来ます。映像も、影絵もすばらしかったです。	初めて大曲の花火を見て、その後来館しましたが、花火の事を詳しく知ることができ、大変興味深く見ることができました。時間の限りがあり、ゆっくり見られなかったので、また来館したいです。
花火師達の前日、当日の行動等とても勉強になりました。命をかけて頑張っている姿に感動しました。小さなコーヒー店でもあればなおよいと思います。	花火工場や創作工房、シアターなどを子供と一緒にじっくり見ることができました。様々なアプローチから大曲の花火を楽しみました。大会にもまた足を運びたくなりました。
とても楽しい場所となっております。日本中、世界中から注目をあびている大曲の花火ですので、これからも活気ある大曲をつくり上げてください。	カフェがあると更に立ち寄りやすくなると思います。妊婦なので、ゆっくり見学したいのですが、すぐに疲れてしまいます。
出身は大曲と言うと必ず“花火”と言われます。資料館に来てあらためて大曲のすばらしさを感じました。岩手にも、大曲の花火のファンはたくさんいます。	花火は近くで見るのが、一番きれいだなと思いますが、資料館の展示の仕方がとてもすばらしく感動しました。また来たいと思います。
とても勉強になりました。大曲について改めて興味をもつきっかけになりました。勉強だけでなく、いつでも楽しみながらまわれるところがいいと思います。また来たいです。	思っていたより楽しめました。子どもと一緒でしたが楽しんでいました。入館料無料なのもありがたかったです。喫茶店でもあれば最高だなと思いました。検討おねがいします。

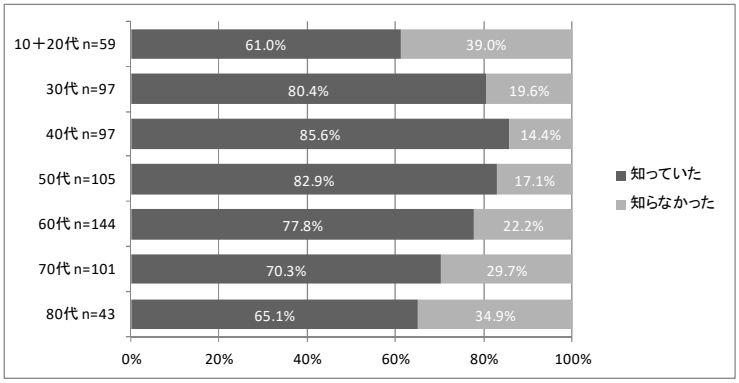
（２）市民による市政評価

市民による市政評価（回答者 676 人）によると、約８割の方がはなび・アムを「知っていた」と回答している。一方で、「知らなかった」と回答した方は約２割おり、特に 10 代・20 代で多くなっている。

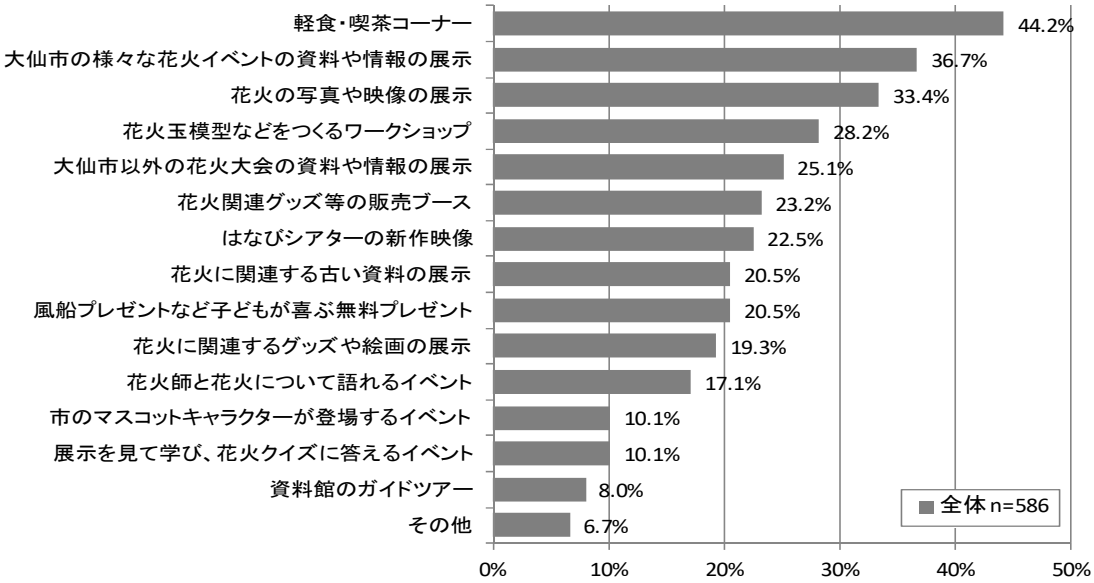
また、「はなび・アムに望む機能等」として、「軽食・喫茶コーナー」が最も多く、市内外の花火大会に関する情報や花火に関する展示内容の強化に加え、「ワークショップ」や「関連グッズの販売ブース」などのニーズが高くなっている。

はなび・アムの認知度



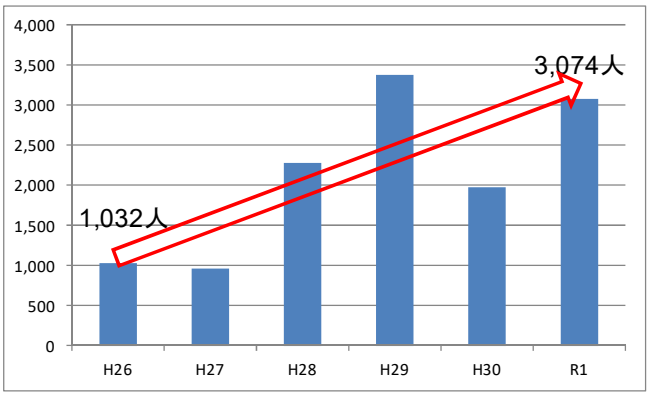


はなび・アムに望む機能等



（３）外国人宿泊者数

全国的に訪日外国人観光客が増加していることに加え、本市を会場に平成 29 年に開催された「第 16 回国際花火シンポジウム」の後継イベントとして、翌年から継続開催している「大曲の花火 春の章」を中心に海外からの団体ツアーが開催されるなど、外国人宿泊者数は増加傾向にある。



7　全体評価

本プロジェクトを構成する各事業については、概ね計画どおりに進捗し、予定どおり令和元年度をもって完了している。

本市の花火伝統文化を継承し、広く示す拠点となる資料館機能と、地域の新たな生涯学習拠点となる生涯学習機能を複合する「花火伝統文化継承資料館 はなび・アム」は、平成30年8月にオープンし、全国的にも珍しい花火に関する展示に加え、定期的な企画展示や趣向を凝らした特別展示などを開催しており、オープンの同月に開催された「第92回全国花火競技大会『大曲の花火』」当日には、1,800人を超える方々にご来館いただくなど、令和元年度の利用者数は目標値を上回る年間33,455人となった。

また、来館者の内訳を見ると、市民、県内他市町村、県外からの来館者がそれぞれ約３分の１となっていることから、全国の花火ファンのニーズに応えるとともに、花火伝統文化の発信、交流人口の増加に大きく寄与しているものと捉えている。

なお、施設全体ののべ入館者数については、目標を大きく上回るスピードで推移しており、令和２年４月４日には10万人を突破し、記念セレモニーを行っている。

花火資料の収集については、目標を大きく上回るペースで進捗しており、令和元年度には16,069点にのぼっている。これは、はなび・アムの完成に伴い、専任の部署が設置されたことや資料の保管環境が整ったことが主な要因であると捉えている。また、その種類は花火大会の開催プログラムやポスター等の印刷物、テレホンカードなどのカード類、花火に関する書籍のほか、火薬の配合を記した秘伝書や古い打上げ用機器などの貴重な歴史的資料、世界の玩具花火といった珍しい資料など多岐にわたっている。

花火学習講座の受講者数については、初めての試みが多く、目標設定時に受講者数の予測が困難だったことや、就職希望者の講座受講がなかったため、予定していた就職マッチング講座を開催できなかったことなどにより目標を達成できなかったが、一方で、在職者向けのスキルアップ講座では受講者数が増加傾向で推移しており、平成26年度実績と比較すると約1.5倍となっている。さらに、高校生向けの出前講座も実施しており、次代の花火伝統文化を担う人材の育成にも取り組んでいる。

本市への観光客数については、台風や少雪などの影響によりイベントや冬期スポーツ施設への観光客数が大きく落ち込んだことに加え、豪雨災害等により再開の目処が立たない施設があったことなどにより目標を達成できなかったが、一方で、「大曲の花火 春の章」や「秋の章」などの年間を通じた花火イベントが定着しつつあり、天候の影響等による特殊事情を除き、平成26年度実績と比較すると微増となっている。さらに、平成29年に開催された「国際花火シンポジウム」を契機に海外からの団体ツアーが開催されるなど、外国人宿泊者数は増加傾向にある。

8　今後の推進方針

民間アドバイザーの意見や全体評価を踏まえ、次のとおり推進するものとする。

（１）魅力的な施設づくり

引き続き花火資料の充実に努めながら、資料の最適な保管や公開方法の検討に加え、調査・研究にも取り組んでいく。収集資料を活用した企画展示や特別展示については、来館者の興味を誘い、理解を促進するよう内容の充実を図るとともに、花火の魅力や伝統文化としての価値が連鎖的に拡がっていくような仕組みを検討していく。常設展示については、体験型の展示物を中心に計画的な更新を行い、楽しみながら花火を学べるコンテンツの充実を図る。こうした取組に加え、来館者のニーズを踏まえつつ、資料館機能と生涯学習機能の相乗効果を発揮しながら、多くの花火ファンを惹きつけ、何度でも訪れたいと思っていただけるような魅力的な施設づくりに取り組んでいく。

（２）花火に関わる人材の確保・育成

花火の伝統文化を確実に継承していくためには、花火に関わる人材の確保・育成が重要であることから、花火の魅力はもとより、花火に関わる仕事の魅力発信など、移住・定住促進施策と組み合わせた取組を進めるほか、全国の花火鑑賞士と連携しながら、四季の「大曲の花火」に併せて開催している花火セミナーの拡大・拡充により、花火を鑑賞する立場から花火の振興を支える人材の創出と育成に取り組んでいく。

（３）花火ブランドを活かした交流人口の拡大

新型コロナウイルス感染症の世界的な流行により、海外はもとより、県外からの誘客も非常に難しい状況にあるが、令和２年度に入り、県内や近県を行き先とする修学旅行のニーズが高まっており、実際に訪問先の一つとしてはなび・アムが利用されていることから、この機会を捉え、継続的な修学旅行の誘致に取り組むとともに、今後の動向を見極めながら、春夏秋冬、四季に開催される「大曲の花火」の情報発信や、はなび・アム、煙火製造工場と連携を図りながら、プライベート花火や模擬花火玉づくりなどの体験を提供する体験型観光メニューの造成、新たな観光ネットワークの構築、宿泊施設の不足を補うイベント民泊の拡充など、通年で誘客が図られる仕組みづくりに取り組んでいく。

（４）花火ブランドの戦略的な海外展開

アフターコロナの海外との本格的な往来再開を見据え、旅マエ・旅ナカ・旅アトを意識したインバウンドの推進に取り組むほか、花火イベントで観光振興に取り組む世界の都市との交流により「大曲の花火」を世界に発信する「国際花火 観光都市交流推進事業」や、海外で活躍する花火業者が参加する「国際花火競技大会」の本市での開催など、花火ブランドの戦略的な海外展開を推進していく。

【プロジェクトチーム構成員】

大仙市	総合政策課、観光課、生涯学習課、文化財保護課
県	地域づくり推進課（幹事課）、観光振興課、資源エネルギー産業課、教育庁生涯学習課、仙北地域振興局